

## はぐくむ 無償のサッカー教室

## 体験による学びの場を

先週末、さいたま市内の小学校のグラウンドで、さいたまユースが開催する「サッカークラブ」を久しぶりにのぞいた。30人ほどの小学生が若いコーチたちと一緒に走り回っていた。この活動のきっかけは、都内の大学で教員養成に携わっていた頃、学生が「先生のようにほくもボランティアをしたいのですが」と声をかけてきたことだ。彼と話し合っ

た。彼は卒業後、北陸地方の高校

教師として赴任したが、そのサッカー仲間、プロのサッカークラブを経て高校生らを指導している若者たちがコーチを引き継いだ。新型コロナウイルスの感染が広がってからは弁当の配布になったが、子ども食堂の方々にも協力していただき、昼食とおやつも提供してきた。外国籍の子どもや貧困など様々な家庭背景を持っている子どもたちも集まっている。寄付集めをしているが、運営はなかなか大変だ。

活動を始めて4年。子どもた

ちは全員が地元の小学生で、当初は20人ほどだったが、今は五十数人が登録している。4年前、ボールを追いかけるのに精いっぱいだった小学1年生が、今では堂々と身体でボールを奪いに行っている。あつという間の4年を感じさせられた1日だった。

この活動は、幼少期からの人間関係を育てること、文化、社会、スポーツという人間の「体験による学び」を前提にしたものだ。親の経済力が子どもとの学力と体力に大きな影響を与えることは間違いない。しかし、子どもたちは、互いに息づかいを感じ、自分の目で世界を見ようとする。そこに必

要なのは、子ども同士が身体を丸ごと感じ取れる「じか」の距離である。「いのち」を大切にすること、子ども同士が息づかいを共にし、生きがい、希望、悩み、そして人格を互いに尊重し合い、信頼関係を築き合うということなのだろう。

本来、家庭や学校でこのような能力や関係性は育っていく。しかし、それが家庭や学校で求められないような環境の中で生きる子どもや若者たちのためにも、それに代わる居場所を地域につくり続けるしかない。

さいたまユースサポートネット  
代表 青砥恭